知事広聴「平太さんと語ろう」　記録

【日時】平成 27 年 10 月 20 日（火）

午後 1 時～3 時

【会場】磐田市アミューズ豊田

1　出席者

・　発言者　磐田市において様々な分野で活躍されている方

６名（男性３名、女性３名）

・　傍聴者　230 人

2　発言意見

	項　　目	頁
発言者１	軽トラ市でまちづくり	2
2	農芸品・農業について	5
3	子育てを支える取組について	7
4	コミュニティー・スクール・ディレクターとは	9
5	外国籍の支援や取組について	14
6	訪問看護について	16
発言者６	地域包括ケアシステムにおける取組について	21
発言者２	ＴＰＰについて	21
発言者４	女性の就労支援について	24
傍聴者１	広聴会に参加して思ったこと	26

【川勝知事】

皆様、こんにちは。この会場を磐田市花の会の皆様によって、かわいくきれいに飾っていただきましてありがとうございます。今日は６人の発言者の方々から、しっかりと意見を承ると、広く聴く広聴ということでございまして、ただ聞きっぱなしにするのではありませんで、お聞きして、もし県に対して御要望なり御質問があればその場でお聞きし、そして御要望に対しては、できること、できないことを明言をいたしますということです。

今日は、意思決定ができる、あるいは意思決定ができるところにきっちりと届けられるような者が来ておりますので、どうぞ皆様方、今日会場の皆様の代表として来られている方、御遠慮なく、皆様のお仕事を紹介していただくと同時に、県市一体でできることがあれば言っていただければということでございます。

もうこれ今回で、知事になってから始めましたので、７年目になりますけれども、40 回をやりまして、41 回目になるんじゃないかというふうに思います。前、袋井と磐田と一緒にやったのが４年ほど前のことだったと思います。

また、磐田は元々国府ですから、そうした高い文化的の遺伝子のようなものが残っているのを感じまして、何か始めるならば磐田で何をやっているのかを見ればいいというような雰囲気も出てきております。非常に市の行政と民間の方々との関係がいいという証拠じゃないかということでございます。

そんなことでございますので、場合によっては、今日は御要望というよりも、いろんなことをお聞きして、それを磐田以外のところで活用するというふうなことになるかもしれませんけれども、できれば会場の方からも意見をいただくような時間を残してくださるようにお願いを申し上げまして、今日のこの２時間、何とぞよろしくお願いを申し上げます。

【発言者１】

こんにちは。私、磐田市商店会連盟の発言者１と申します。本日はトップバッターということで、ものすごく緊張しておりますので、うまく伝わるかどうか心配ですが、よろしくお願いいたします。

以前は磐田市商店会連盟の下部組織の青年部にも属しておりました。しかしながら、この会に属して役に立っているのかとたまに思うことがありますが、このまちが大好きなだけで務めさせていただいているのかもしれません。

具体的な活動内容としましては、市内の商店会同士の取りまとめやイベントなどへの積極参加、また新規事業の計画、実施に向けた取組をしております。言葉ではいいことを言

っていますが、現状は惨澹たるものです。

商店街の数も、昭和の時代は30近い商店街が存在しましたが、近年では７商店街に減少、私がいる町の加盟店も過去 60 店舗近くあったのに対して、今は 11 店舗と、非常に寂しい状況です。売り出しなども、現在も行っている組織もあれば、ほとんどがこれといった活動ができず、会の存続を守るだけで手いっぱいな組織がほとんどで、以前に比べ、活動の意欲が減ってしまい、形骸化しているところが多くなっているのが現状です。

そんな中、小売業を営んでいる同世代同士、子供のころみたいに楽しいまちをしてみようかという簡単な感じで、商店主仲間数名とできることからやってみようと立ち上がってみました。

まずは自分の店の前をきれいにしようと、店の前に花や木を飾ったことから始まり、その後、もっと商店街を歩いてもらえるようにしようと、そこで一般消費者、学生を交え、まちづくり活動を発足したり、ショップをつくってみたり、そしていろんな活動をしている中、いろんな交流が増えた中で、幾つものことに気づかされたことがありました。

そんな交流の中でいつも出てくるキーワードは、「自分のまちが大好きだよね」という言葉です。ありきたりで商売しているだけではおもしろみもなく、儲けは当然大事なことですが、もっとこの大好きなまちをより楽しくしていこうじゃないかと、そんなふうに感じてからは、遅咲きながらもいろんな事業に積極的に取り組むようになったのが、ちょうど７年前でした。

当時の商店会連盟の会長や、商工会議所の皆さん、市役所の皆さんからも、「いろいろやってみな」っと、ぽんと簡単に背中を押され、応援していただいたことは今でも忘れません。そして１か月に１回でも何かしらジュビロードで何かやっているよねと言われるようなまちにしていこうと、今では開催されていましたジュビロード夏祭りを含め、コラボショップ、１つの扉で２つのお店の開催、まちゼミ磐田の積極参加、県内の各市町村で行われたプレミア商品券活用した独自の仕掛けづくりをしたり、また年４回開催している「みんなで軽トラ市いわた駅前楽市」と、さまざまな取組をしていますが、まだまだ足りないかもしれませんし、どの事業に関しましても、まだ中途半端な展開だと思っております。

しかし、この磐田市内の商業活動でよいと思っていることは何でもやってみよう精神、やってみて改善するところがあれば直し、また失敗したらやり直せばいいというスピード感のあるところだと思っております。

今述べた中でも、「みんなで軽トラ市いわた駅前楽市」。最初の取っかかりは日本三大軽

トラ市と言われる愛知県の新城市で行われている軽トラ市を視察したとき、ジュビロードでやったらおもしろそうだよねって簡単に思ったのがきっかけです。

後は地元の商店街、商工会議所と磐田市役所から最大限の協力と惜しみない後押しもあって、１月の会議所の賀詞交換会のときに「磐田で軽トラ市を開催します」と、掛川、浜松に次いで県内３番目の軽トラ市として声高らかに宣言しました。

応募してくれた出店者数も 90 台と県内最大規模の規模となり、３月 20 日の開催まで待つばかりのとき、今も忘れはしない 3.11 東日本大震災、３月 20 日に開催するか否か、あの当時は本当に迷いました。しかし開催させていただきました。最初、本当に想像もしていなかったですが、第１回目から来場者数も１万人近いお客さんが来ていただきました。また、たった３時間で毎回来場者さんたちが多くの買い物をしてくださって、購買意欲が高いことを改めて痛感させられました。しかも先月の９月の開催の第 19 回目まで、ずっとそうなんです。

最初はこんな規模になるとは思ってもいなかったのですが、回を増すごとに軽トラ市の運営は軌道に乗ってきましたが、残念ながらいまだに商店街側から見た感じは、期待した実績までは得られていないと思いますし、楽しめているのかと疑問を感じます。

そんなとき、いつもすべてみんなが楽しめるイベントにと、「みんなで軽トラ市」という名前をつけたことを振り返りながら、毎回メンバーと試行錯誤し、単なるイベントとしてじゃなく、この磐田を発信できる事業にしていこう、商店街をもっと知っていただこう、それ以外の事業に対してもこの磐田にとって、地元商店街にとって何がよいのか、何が合っているのか、何がマッチングしているのかと、いろいろ変化させながら、いろんな方々と共に楽しめる事業になるよう、そして最終的には空き店舗が１軒でも埋まるような取り組みをしていきたいと思っております。

最後に、今述べたことはすべてにおいて簡単なことではないと思っております。しかし、これからも多くの方々から温かく見守っていただきながら、いつしかこのまちは楽しいねって感じてもらえることができるような磐田市になると信じていますので、関係各所の皆さん、またここにいらっしゃる皆さんも、お買い物はぜひこの磐田市でよろしくお願いします。

そして来年３月 13 日、この大好きな磐田の顔でもあるＪＲ磐田北口広場が完成します。また、「みんなで軽トラ市いわた駅前楽市」も６周年を迎えるに当たり、これを記念しまして、県内の軽トラ市運営団体及び磐田市との関連があります友好都市などからも応援をし

てもらいながら、いつも以上に盛大な軽トラにしていきたいと、そして県内でも代表的な事業になると思いますので、一度お越しいただければと思っております。よろしくお願いします。

【発言者２】

皆様、こんにちは。磐田市内で海老芋、白ネギ、スイートコーン、キャベツを生産している発言者２と申します。特にその中でも磐田市の特産である海老芋を主につくっております。

実は、私は川勝知事の農芸品という言葉が就農のきっかけの１つになりました。そんな中、今現在磐田市主催の農業塾と農協の海老芋部会の担い手講習会の講師の１人として、磐田市民や就農希望者に海老芋の栽培方法を教えております。講師をすることによって、少しでも海老芋の栽培人数や面積が減っているので、拡大、産地の維持をしていければいいなと思いながら講師をしております。

また、農協海老芋部会では、海老芋生産研究員として病害虫の問題解決や、よりおいしくて大きい海老芋の栽培方法などを研究しております。

課題といたしまして、海老芋は磐田が全国の８割を占めておりますが、ほとんど市内で消費されていないです、残念ながら。主に東京や関西などの大都市に行ってしまっているため、磐田市内でもう少し消費していただければなと思います。

そして、また海老芋自体の認知度がまだまだ低いため、海老芋収穫体験や、都市での試食会を開催して、海老芋を広めていきたいと思っております。

そして、過去に私は海老芋を使用した加工品の開発、六次産業化を行いましたが、現在製品の試作の段階でとまってしまっております。進んでいない原因として、畑仕事との両立や売り方、営業ノウハウがないことといったことが挙げられるので、知事に何かアドバイスをいただければいいなと思っております。

今後の目標といたしまして、浜松に来たらウナギを食べるというように、磐田に来たら海老芋を食べるというようにしたいと思っております。そして、わざわざ海老芋を食べに来る、また購入しに来るというまちにしたいと思っております。それとともに、農業をすること自体がやっぱり楽しいので、農業を続けていきたいと思います。ありがとうございました。

【川勝知事】

発言者１さんが７年前にいろいろと考えられて、この楽市を始められた。なかんずく

軽トラ市を始められて、今お聞きすれば、何と１万人以上の方々がお越しになるということで、しかも県下で３番目に始まったそうで、ともかく運ぶ車もあるし、運ばれるものもたくさんある。

たくさんの方がいらっしゃって、そしてそれは何のためかというと、売るためというよりも、このまちが好きだからだと。好きだということは楽しいから、楽しくなるから、そこに持っていきたいという、だから販売が目的でなくて、まちを励ますためにどうしたらいいかというのが一貫して追及されているのがお見事だと思います。

そして、今の課題が、軽トラ市といかにして商店街の活性化に結びつけるかということだということで、すぐに私もいい知恵があるわけではありませんけれども、この志がある限り、商店街の方からも何かの声を上げられると、ここに行くと楽しいということが出てくるに違いありません。

ともあれ、これからワールドカップ、あるいはオリンピック、カルチュラル・オリンピアードというのは、日本全体を皆様方に見せようと、世界の人たちに見せようということで今始まっているんですけれども、前回のロンドンオリンピックで、ロンドンオリンピックの年よりも次の年の方がイギリスを訪問する人が多かったということは今までなかったことです。オリンピックの年の後は一気に訪問客が減るということだったんですが、イギリス全土でいろいろな催し物をされたと、そのことが訪問客を翌年に増やすということになったと。日本でもそうしようということになりまして、今さまざまな文化遺産、これを掘り起こしてお客様に楽しんでいただこうと。

そこに来ると、発言者２さんのところの白ネギやトウモロコシやいろんなものをつくっておられると。花の都だけでなくて食の都であって、その食材を活用して、そして日本中、だれもが大好きなのは新鮮な食材、これを季節に応じていただける、旬のものをいただくと。というわけで、ここは引きつけるに値するものがものすごくあるところです。今、それに関わることを皆様は市長さんのもとでいろいろな農芸に関わるアカデミーだとか、あるいは福田のところでの食のセンターのようなものが準備されているということで、もちろん国府のもとのことがございましたので、来れば必ず食事をするということがあると思います。そしてそれがたまたま軽トラ市と結びつけば、それはともかく楽しいと。

そしてスポーツも、子供たちを大事にしていくために、どういうふうにしたらいいか。磐田から始めるというふうに今なっているんですね。ですからそういう健康な少年少女、そして青年をつくり上げていく。もちろん大人もそうです。大人がやっているということ

が、こういう農作業をやっている人と、そしてこれを消費者に届ける人が組むとうまくいくというふうに思います。

しかも、うれしかったのは農芸品という言葉、これは工芸品という言葉がありますね。その工芸品をつくっている同じ日本人の手で、もっとそれよりも古くから農作物をつくっているわけですから、それも品種改良を重ねて、さまざまなお花や海老芋などを含めて品種改良してきました。そういう品種改良に改良を重ねるそういう匠の技を宿した農作物は農業芸術品だ、工芸品と一緒だということで農芸品だと。青年農業士を、もう取っていらっしゃるの？そういうところにこそ、むしろ学ぶ場があるというふうに、この価値観を転換しなくちゃいけないんじゃないかと。身につくようなそういう苦労というものを大地と語らい合いながら、また作物と語らいながら学んでいくということこそ、これからの本当の勉強の仕方ではないかというふうに思うわけです。

そうした志をもって、発言者２さんが農業をやられていると。こういう人を僕はモデルにしていきたいというふうに思っている次第です。大変勉強になりました。ありがとうございました。

【発言者３】

発言者３です。よろしくお願いいたします。私の活動はママと子供の支援をしています。その中で大きな柱として、長期休暇の子供たちの居場所づくりの活動を主にしています。

この活動を始めたきっかけなんですけれども、私の子供が小学校１年生に上がったときに、長いこの夏休みを一体どうやって過ごそうかと思って、私自身の方が危機感を感じて、どうせうちの子供の勉強を見たり世話をするんだったら、うちの以外の子供も一緒に勉強したり、遊んだりした方が絶対楽しいだろうなって、そういう軽い気持ちで近くの公民館を借りて、「寺子屋会」と称して開催しました。

うちの子供のお友達が数人集まってくれて、12 日間ぐらい開催しました。正直終わってやれやれといった感じだったんですけれども、冬休みが近くなったときに、その参加した子供たちの中から、「ねえねえ、おばちゃん、冬休みも寺子屋会やるんでしょ」って言われて、「えっ」って私はすごいびっくりしてしまいました。

というのも、冬休みは主婦ですし、大掃除やらお正月の準備やら何やらかんやら忙しいので、冬休みはちょっと無理だよと言いかけたんですけど、その子供たちが「やるんでしょ」って、とってもうれしそうな顔して言うので、「じゃあ冬休みも忙しいけどやってあげるよ」って言って、その冬休みを始めました。

それが続いて春休み、翌年の夏休みといってもう４年が過ぎました。ロコミでだんだん広がってくれて、市内でいろんな複数の学校からも来てくれたり、あと年齢も、一応小学生のための居場所づくりとしているんですけれども、家庭の事情によっては、その下の幼稚園の子とか、下の子の面倒を見てほしいという御家庭もあるので、その子たちも預かったりして行っています。

４年経って、私もいろんな組み立て方がわかったので、子供たちにこんな体験もさせてあげようとか、こういうことをやったら保護者も喜ぶかなと、いろいろ中身を充実させたり、協力してくれる方も増えてきたので、やってみようと思って、張り切ってやっていた年があったんですが、実はそのときに家に帰ったとき、私は３年目だったんですけど、爆発してしまいました、家に帰って。主人と娘の前で大泣きをしてしまって、「もうお母さん、こんな大変なことやってられない」と言って大泣きしてしまいました。

やっぱり表面上は子供たちのためにということで一生懸命やっていたんですけれども、やはりいろんなことをボランティアでしていたりする大変な面もたくさんありました。そのとき主人がそっと「あなたはだれかに頼まれてやっているの」って聞かれたんです。私、初めのきっかけは本当にそういう軽い気持ちでやっていたので、子供たちが楽しければいいという気持ちで、本当に軽い気持ちで、私これが好きだからやっているんだというその原点に戻ったんですね。

なので、いろいろ皆さんアドバイスはしていただくんですね。もうちょっと組織化した方がいいんじゃないかとか、行政の方と協力してもらったらいいんじゃないかとか、いろんなプログラムを立てたりすることもあったんですけれども、そうすると私自身が、何というのか、行政の方とかいろいろ組織化してしまうと、どうしても制限や決まりや規則ができてしまって、それこそ幼稚園の子は預かりませんみたいな感じになってしまうと、本来の私がいろんな年齢の子供たちと自然な形で勉強したり遊んだりするという姿が、プログラムを詰め込み過ぎてしまうと、どうしても子供がお客様化してしまって、本来の自由な感じがとれなくなってしまうので、ああ、私は一番初めの原点に戻って、ノープログラム、組織化もしない、行政ともあえて組まないという自分の中で三大指針をつくりまして、４年目に突入してやっております。

そしたら、そういった姿が自然体だったのかどうかわからないんですけれども、参加してきたお母さんの中で、ちょっと車で通うのが不便で、自分の子供が歩いて通えるところで、自分のところの場所でもこういった居場所づくりの活動をしたいんだって言ってくれ

るお母様が１人現れてくれました。

４年目にして初めてだったんですけれども、私はそれを聞いて、ああ、本当にこの活動をやっていてよかったなと感じました。これを大きくしようとか、どんどん広げようというのが私の目標ではなくて、今子供たちに置かれている環境の中で、やはり自由に子供たちが集える環境、場所、そういったものをお母さんというか大人が必要だなと思ってくれる保護者が増えてくれることを願っています。

私はこの活動をしていて、子供たちに何か成果をあげようとかではなくて、子供のころに「ああ楽しかったな、一生懸命いろんな子たちと何か遊んで楽しかった」という子供の楽しかった気持ち、今の子ってなかなか十分に遊べている環境がないなというのは感じています。

外に行っても危ないなとか、プログラムでいろいろ子供向けのプログラムはあるんですけれども、本当に子供たちはたわいもない遊びというのができない環境にあるなと思うので、この活動を通して子供たちが、「ああ、楽しかったね」っていうような感想を持って、大人になったときに、それが何か想像力とかコミュニケーション能力が高められる、後々何かが残ればいいかなと思って活動をしています。

今日、こういう考えを述べさせていただける場所をいただけたことに本当に感謝しています。ありがとうございます。

【発言者４】　よろしくお願いします。初めまして、今年度コミュニティ・スクール・ディレクターという役職をいただき、仕事をさせていただいている発言者４と申します。

御存じない方もいらっしゃるでしょう。コミュニティ・スクールとは、学校教育に地域住民や専門家など、外部人材の力を生かし、地域の子供は地域で育てるという地域とともにある学校づくりを目指しています。この中で私自身の役割は、保護者や関係機関との調整、学校を支援する地域人材の発掘などです。昨年度の役職がコーディネーター、今年度はディレクター、私自身戸惑いを感じながらも、来年はプロデューサーをひそかに狙っていこうと考えています。

「そもそもどんなことをしているの？」と疑問に思う方がいらっしゃるでしょう。昨年度から携わった仕事について総括してみたいと思います。

まず中学校区合同の避難訓練。こども園との引き渡しの連絡調整、赤十字、消防署への連絡調整、訓練備品の引き取り。

全員が同時に行う技術的な家庭科の授業において、ミシンや手縫い、調理実習など、一

緒に指導してくださる方をお願いしたいと、学校からの依頼でボランティアを募集しました。

また、中学２年生の職場体験学習。事前に受け入れしてくださる職場の確保や、事業所への連絡調整をさせていただきました。日々の忙しい業務の中で、たくさんの企業と連絡がとれる昼間は教員が忙しく、部活動が終わる夕方には企業と連絡がとれないという、電話を取り次ぐ事務にとっても、多忙感が増す現実です。

また、キャリア教育の一環として、親の働く姿、仕事への情熱など、地域の講師を招いて中学生に講話をお願いする講師募集などもやらせていただいております。

今後の取組として文化発表会でのボランティア調整、校区一斉クリーン作戦の地域啓発、地域サポーターの確立などを考えています。

このような仕事の取組から、教員、私自身、地域のボランティアの方々、そして生徒自身からどのような変化が感じられたか。まず生徒、子供たちは確実に積極的に物事に取り組むようになり、地域の人と接する機会が増えたことにより、コミュニケーション能力もついてきていると感じています。

そして地域のボランティアの方々は、毎回「楽しかった」「気持ちが若返る」「充実した時間を過ごすことができました」、また本校は年３回オイスカ高校の留学生との交流を行っていますが、「これにおいても興味があるので次回は声をかけてほしい」などと温かい言葉をいただいており、少なからずウィン・ウィンの関係を築きつつあるのでないかと感じています。

現在、核家族の増加、共働きの増加など、社会の変化、地域性など、子供たちを取り巻く環境は昔と違い、著しく変化をしています。物欲の充実感とは逆に心が満たされず、学校に上がる前に個々の精神が確立されているというのが現状です。現場の教員が授業や部活動以外にも精神面のケアなどに時間をとられ、教員だけの熱意をもっても行き届かない部分が多くなってきていると感じています。

希薄になった人間関係を地域のさまざまな年代の方々と接する機会が増えれば増えるほど、生きていく知恵や社会性が身につき、自然と地域の活性化につながるでしょう。この静岡型コミュニティ・スクール推進に知事が力を入れてくださり、御理解と協力をいただいていることに感謝すると同時に、これらを継続していくべきだと考えます。

教員は異動があり、常に一からのスタートです。変わらない地域を支えるのは、変わらない人材育成と確保であり、忙しい部分を手助けするコミュニティ・スクール・ディレク

ターの活用が１つの解決方法ではないかととらえています。

学校と地域との円滑な連携、地域ボランティアなどとの連携、学校の職員だけでは取り組みが難しい課題に、地域の人材と連携し、少しずつよい方向に導く担い手になれればよいと考えます。しかし、この制度はスタートしたばかりですので、課題も山積みです。ちょっと私は要望を言わせていただきます。

コミュニティ・スクールとは何かが、県や市、現場の教職員全体的に理解や周知がされていない。地域の意見や考え方を聞く機会が少ない。そしてこの地域の方々のボランティア精神、このボランティア精神の継続にも限界というものがあります。私にとりましては尊敬に値するボランティア精神ですが、意外に皆さんとてもいろいろな趣味やボランティアをされている忙しい中で来てくださっています。

その方々に少し立ち寄っていただいて、お茶でも飲んでいただきながらお話でもと思うことがありますが、それにはお茶代でさえも学校の予算の中では厳しい状況です。コミュニティ・スクールの原点はこのお茶でも飲みながらの話の中にたくさんのきっかけにつながることがあります。

そして最後に、私自身の仕事。教員は３月まで、来年度の異動先がわかりません。しかし私の場合、来年度の仕事があるかどうかがわかりません。昨年度は１校勤務フルタイム、今年度は年間決められた時間内での勤務形態です。この仕事は人と話すことが好きな私にとってとても楽しくやりがいのある仕事です。

しかし来年度の仕事があるかどうかと、身分が保障されていません。扶養から出たり入ったり、我が家の食卓に１品増えるか減るかと、不安定なままの状態や、週何日間の勤務では、１年間の反省点を次に生かそうとか、来年度はこんなことをやってみようかという意欲が失われます。

私のようにコミュニティ・スクールに関わる方を増やし継続していくには、少なからず予算が要ると思います。財政厳しい折、少しの空白の予算があれば、ぜひコミュニティ・スクール推進への予算へと望みます。

【川勝知事】

発言者３さんの話には、本当に感じ入りました。御立派だと思います。子育てをしながら、きちっとそういう資格をお取りになっているので、子供が自由に遊べるようにとおっしゃっているその方は、ちゃんと子供の発育について勉強し、かつ実習もされて、御自身のお子様が実習の相手ということになったと思いますけれども、それをベースにしてこの

ママさんの寺子屋をおつくりになって、子供が遊ぶ中で、強い子と弱い子というのは、体が大きい、あるいは年長者で、自然にかなわないものがあるとか、あるいはか弱い者に対しては、かまって差し上げないとだめだというそういう思いやりの心とか、そういうものを自然に学んでいくわけですが、これは学校で先生がこういうものだと言う、あるいは学校の本を使って、道徳の本を使ってやっても、それは十分に体に入らないと思うんですけれども、子供が自由に遊ぶ中でそうしたものを学ばせるというのが一番いいとおっしゃっている方もいますね。

ですから、このやり方はもっと広がっていいなと。ですから目の届くところに子供がいないといけないので、この活動がどんどん広がればいいというふうなことではなくて、そういう活動的なものがそれぞれの地域で、ネットワークの中でお知り合いになった方が幾つものそういう核をつくっていかれるといいと。

磐田は今、人口が 17，8 万ですか、すごく適度な人口規模じゃないかというふうに思います。合併して大きくなり過ぎて目の届かない、また余りにも小さいところもありますけれども、非常にいい規模じゃないかというふうに思いますが、こういう女性が１人でもいらっしゃることは財産ですけれども、もっと増えると子育てがすごく楽になるんじゃないかというふうに思います。

今、静岡県全体の合計特殊出生率が 1.5 あたりで、こちらはそれを上回っておりますけれども、今だんだん、だんだんと高齢化が進んで、元気なおじいちゃん、おばあちゃんがいるのはいいんですけれども、やはり子供が安心して産み育てられるというその環境をつくることは極めて大切で、それはやはり自分の子供以外の子供に対してかまえるような、世話できるような、そういうのが自然発生的に出てくると。しかし陰に隠れてきちっと行政はそれをサポートするというような関係がいいんじゃないかと。そしてママさんも自由に大事に子供を預かって、それを遊ばせているというそういう関係ができているんじゃないかという感想を持ちました。

そして発言者４さん、基本的に教育を、これから学校の現場だけでなくて、地域ぐるみ、社会総掛かりでしていこうと。これは言葉としては簡単なんですが、なかなかに難しいんです。そうした中でコミュニティ・スクールと。地域社会の中で学校がありますよと。そのためには間を結ぶ人がいないといけないと。そして地域社会のいろいろな防災や、あるいは企業訪問やなんかを助けようと。

こういう人がいないと地域と結べることができません。だれでも勝手にできるというも

のじゃないと思います。やはり学校の経験がある。それからこれまでコーディネート、それからディレクターですか、そういう役割をしてきた人の後継者をどんどんつくっていくためにも、途切れたら具合が悪いし、ある程度の期間はやっぱり保証しなくちゃいけない。

今、発言者４さんがおっしゃったように、確かに教員の異動というのは３月に一斉に出ますけれども、それはいきなり違うところにやらされたりするわけですね、おっしゃるとおり、地域の中でようやくできたというその次のものをまた新しい先生と話ながらやっていかなくちゃいけないと。この方もそれができなくなったら、せっかくの蓄積が台無しになるので、やはり指導者の継続性みたいなものも考えなくてはいけないと。

それから評価というのもやっぱり考えなくちゃいけない面もあると思いますけれども、地域コミュニティのためのスクール、これを今、静岡県は恐らく日本の中で最も進んだ形でシステムをつくろうと思っています。すなわち今までは、教育委員会が全部決めておられました。しかし、国の規則によりまして、首長が教育委員会に入る。これの会議のことを総合教育会議といいます。この４月からその総合教育会議というのがスタートしておりまして、私も３回そこに出ております。

しかし、総合教育会議に出て、教育委員の先生方に私が何かしゃべったときに、私の自分の勝手な考えだけで言ってしまうと何もなりませんので、私が何を代表しているかというと、社会を代表しているということですから、発言者４さんも含めて、いろいろ各界の方に入っていただいて、地域とともにある学校づくり検討委員会というのを昨年度立ち上げまして、そして、その報告書をいただきました。

その全体の座長は企業の元社長さんです。つまり社会のリーダーだった方ですね。そういう方に座長になっていただいて、そこから出た御報告書を今、実践しているわけです。その実践の１つが、地域のスポーツクラブをつくりなさいという報告書の提言があります。

それを誰がやるか。全部でき上がってからやるのじゃなくて、やりながら考えた方がいいということでございます。

そうしたときに地域コミュニティをつなぐ人が要るんですね。コーディネーター、あるいはディレクター、あるいはプロデューサー。こういう仕事がなければ、地域づくり、地域ぐるみ、社会総がかりという教育はできないということです。

しかもすべての人が教育に携わることはできませんので、自分の得意分野、例えば海老芋づくりだとか、何かまちの経済のことだとか、そういうのを教えるのは、春休みとか夏休みとか、あるいは学期に１回の放課後とか、あるいは場合によってはホームルームの時

間とか、そういうときに１回ちゃんと学校の中に入れるようにするシステムが必要で、それの間を取り持ってくれる人が必要だということでございます。

【発言者５】

皆さん、こんにちは。中学生学習支援事業１期生、あと、外国にルーツを持つ若者グループの代表という肩書きの発言者５です。大変緊張しており、手が震えておりますけれども、頑張ります。

僕は日本で生まれて一時期ブラジルへ行って、その後また日本へ帰ってきたという経緯があるんですけれども、中学校に上がったときに、この中学生学習支援事業というのを東新町にある「こんにちは！」多文化交流センターというところで支援を受けていました。これは最初は人数少なくて、恐らく３，４人ぐらいしかいなかったと思うんですけれども、そのときはほぼ１対１の環境で勉強を教えてもらっていました。

中学３年生までそこに通っていて、１時間週２回ということだったんですけれども、決して多くない時間だったんですけれども、そこで得られたものというのは非常に大きくて、無事に高校進学を果たせました。高校行ってからもちょくちょく通っていたんですけれども、そこで高校進学というのを果たして、今大学生になって、勉強しております。

そこで大学に入って、今まで教えてもらう、支援をしてもらうという立場にあったんですけれども、逆に教えるとか、支援をするという立場になって、「こんにちは！」の教室でも週１回は行けるようにしております。

それで最初、この「こんにちは！」の学習支援事業について簡単にコメントしたいんですけれども、現在の教室は生徒が増えておりまして、20 人ちょっと超えているぐらいですかね。20 人超えで、果たして全員が向上心を持って教室に来ているのかどうかというのが問題なんですけれども、恐らく違います。

将来のことをしっかり考えている子とか、ここで勉強したいという明確な意思を持った子もいるんですけれども、逆に将来何も考えてないとか、高校にできれば行きたくないとか、中学行くのも嫌だという子も当然いるんですよね。

これは人数が増えたことによっていろんな子が来てくれるようになったわけですけれども、全員に対する平等な支援というのは難しいのかなと思います。けども、それの改善に向かって今現在僕が頑張っているところです。

次に、外国にルーツを持つ若者グループなんですけれども、これ自体は浜松で活動しているんですけれども、外国にルーツを持っている若者で構成されていまして、僕自身含め

磐田の子が２人、あとは基本浜松の人なんですけれども、この活動は同じく外国にルーツを持っているような若者、子供たちに向けて、将来の勇気とか、どういったビジョンがあればいいかというものだったり、日本人に向けても相互理解だったり、多文化共生に向けて、それに何かつながるような活動をやっています。

具体的には、昨年度は軽いトピックで国際結婚というテーマでディスカッションをしたりとか、外国人の若者を対象として就職応援セミナーということを行ったんですけれども、これは実際に外国籍だけれども、消防士になったりとか、実際就職をしたという方のお話と、あと実際の企業に来てもらって、国際的な人材、今こういう人が欲しいですよというお話を聞いたりですとか、座談会を開きました。

それで先週は実際に浜松の高校に行って、授業の１時間１コマ借りて外国籍の子たちを集めて、将来についてどうしたいかというのをベースに交流イベントを開きました。

高校行って感じたというのは、みんな割と将来のこと考えているなと思ったんですけれども、やっぱりお金の問題だったり、自分の学力が低くて進学なんてできないというそういう考えにとらわれているというそういう子供たちが多いなという気がしました。

それで子供たちには当然もっと自発的になってほしいということなんですけれども、これは僕やこのグループのメンバーとかで頑張っていきたいと思うんですけれども、それと同時に情報の発信だったり、環境の充実が何か変えられるんじゃないかなって思っています。

ただ、僕みたいな移民二世、移民してきた人たちのその子供たち、移民二世の活躍というのをもうちょっと広く見せて、一種のロールモデルとして活動して、みんなに知ってもらえれば未来への選択肢というのが何かしら広がるんじゃないかなって思っています。

それで、その活動をうまくやっていけるように、つながりというのができればなと思っていて、県の方々とかに要望を出すとすれば、何かしらのパイプ役でしたり、こういうのがあるよと紹介をいただければ、非常にスムーズに活動ができていけるんじゃないかなと思います。

今日こうして発言をして、いろんな方に知ってもらっているので、現在進行形で何か小さな目標は達成できているので、こういう機会に本当に感謝しております。

それで、簡単なまとめになると思うんですけれども、まずは皆さんにこういうことがあるよというのを知っていただきたいです。それで外国人というのはこうだという何か決まったイメージはできるだけ持たずに、ちょっと柔軟に対応していただければ本当にうれし

いです。ありがとうございました。

【発言者６】

こんにちは。発言者６です。私は以前は病院で看護師をしていましたが、15 年前から訪問看護師として地域で活動しています。

訪問看護は病気や障害がある方のお宅に看護師が訪問し、安心して過ごすことができるよう、日々の暮らしの中に医療や看護を届ける仕事です。訪問看護師がいる訪問看護ステーションは、磐田市７カ所あります。私がこの訪問看護の活動に至った経緯をお話しします。

病院に勤めていた 20 代のころ、寝たきりの祖母を両親が自宅介護していました。床ずれができてしまい、父から「床ずれがひどいから、とりあえず家にあるもので処置してあげたいんだけど」と聞かれ、病院での処置方法しか答えられず、愕然としました。

私はこれをきっかけに地域の生活の中で頼りになる看護師になりたいと強く思いました。そして介護保険開始と同時に訪問看護に携わるようになりました。病気や障害の状態に合わせて、療養者さん、それから家族と一緒に生活の方法を考え、必要なケアを提供しています。

さらに、訪問看護師として在宅療養を推進するために、今年、訪問看護認定看護師という資格を取りました。静岡県内の訪問看護認定看護師は 11 名とまだ少ない状況です。これから私はますます質の高い看護を実践すること、看護師に対し相談指導を行うこと、また地域の医療・介護・福祉の連携を深め、地域住民の啓発を行い、地域の力を高めるように尽力することなど、リーダーシップを発揮し、訪問看護認定看護師としての役割を果たしていきたいと思っています。

次に、実際の療養の流れと訪問看護の役割についてお話しします。肺炎や心不全、がんなどの病気になった場合、まず地域の診療所や病院に受診し、必要に応じて市立総合病院など、急性期病院で専門的な治療を受けます。急性期病院は高度で専門的な医療を行う病院ですので、長く入院することができません。治療が終わったら家に帰るか、ほかの病院や施設に移ることになります。そのときに病院から追い出されたと感じることがないように、現在病院と地域がスムーズにつながる取り組みに力を入れています。

療養者さんと家族がどのように過ごしたいかという意向に沿い、病院の医師や看護師、地域の在宅医、訪問看護師、ケアマネージャーなど、医療・介護の専門職が連携し、安心して家に帰ることのできるようにしています。

あるアンケートによりますと、入院患者の６割以上が家に帰りたいと思っています。その反面、病状の変化が心配、家族に迷惑をかけてしまう、とほとんどの方が不安な気持ちを抱えています。そこで訪問看護の出番です。唯一、生活面と医療面の両方を見ることができるのが看護師です。

主治医の指示のもと、訪問看護師が暮らしの場である自宅に訪問します。体調の確認、薬の相談、傷の処置、点滴や注射、痛みを軽減するケア、食事の取り方、排泄の対応など、生活全般から医療まで支えます。それから病気の予防から看取りまで支えます。

訪問看護の対象は幅広く、赤ちゃんから高齢者まで、さまざまな病気や精神、難病、障害などの療養者とその家族です。

今日は地域住民の方にお願いが２つあります。１つ目は、今後もっともっと地域の皆さんに訪問看護を広めたいと思いますので、身内の方、近所の方に、訪問看護をぜひ教えてあげてください。もし病気になっても、地域の訪問看護を利用すると、安心して最後まで過ごせますよと伝えてください。

２つ目は、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生最後まで続けるために、元気な今のうちから自分の生き方や大事にしている思いを家族と話し合っておいてください。例えば、年をとってご飯が食べられなくなった場合、点滴や食事のチューブは入れずに、家で好きなお酒を少しなめて過ごしたいとか、できる限り治療してほしいとか、具体的に自分の思いを家族に伝えておきましょう。

万が一、認知症や病気により意思を伝えることが困難になったとしても、家族が本人の思いを尊重した選択をすることができます。そして、住み慣れた自宅で自分らしく暮らしていきましょう。

最後に、県や市に伝えたいことがあります。訪問看護について大きな課題が２つあります。１つ目は、訪問看護の活動をするに当たり、訪問看護ステーションの数や看護師の不足です。２つ目は、看護師５人以下の小規模ステーションがほとんどで、経営が困難なことです。

静岡県は訪問看護ステーションの数は全国の平均以下です。在宅療養を支えるには、10年後までに訪問看護師の数が３倍必要だと言われています。静岡県看護協会や、静岡県訪問看護ステーション協議会では、訪問看護師の育成や潜在看護師の掘り起こし、訪問看護の質の向上の研修などの取り組みを強化しています。

静岡県として今後の在宅療養推進における訪問看護の強化について、１つ目として、看

護師人材確保の件、２つ目として、訪問看護ステーションの確保と安定経営について、知事のお考えをお聞きしたいと思います。ありがとうございます。

【川勝知事】

お２人とも立派ですね。発言者５君は、磐田の外国籍の中学生を支援する事業の１期生、そして大学に入ったと、大したものですね。ですから、この支援事業にとっては、あなたは今ロールモデルというか、偉大なる先輩と、ヒーローですよね。ですから、この発言者５君みたいになれますよ、なっていきましょうというそういう目標になりますね。

今、静岡県下にブラジル国籍の方たちが２万 7,000 人ぐらいいらっしゃいます。全国で２位ですね。特に磐田や、あるいは浜松に多いわけですけれども、今そういう外国籍の中学生を支援しようというそれを磐田で立ち上げられているので、立派ですね。

そして、先ほど多文化共生とは、文化を共有するもののことを民族といいます。ですから多文化共生というのは多民族が国籍あるいは民族、それを関わりなく同じように社会で対等に生活ができる、仕事ができる、それが多文化共生の意味で、そして大学にはそれを基本的な科目にしている人がいるわけです。またそれを大学の方針にしているということで、それがこの外国にルーツを持つ若者グループの活躍になっているのではないかというふうに思います。

これはなかなかに難しいんですが、学校の先生は、中学生も小学生も、高校でもそうだと思いますけれども、外国の経験がない人が教えているので、そこに外国人のお子様がいらっしゃると、外国人として見て、その目がそのままそこにいる教室の子供に伝わります。そして、ましてや目の色が違うとか、髪の毛が違うとか、肌の色が違うというふうになると、その人を外国人として先生が見ると、そのまま子供たちもそうして見ることになります。

ところが、そうでない青年たちもたくさん今、育っています。例えば青年海外協力隊で２年間、国費によって開発途上国、そこでいろんな仕事をすると。仕事をするといっても、ほとんど学ぶことで苦労することばかりなんですが、そこで自分が外国人なわけですね。そういう苦労をして帰ってくると、そこに１人しかいない、２人しかいない、何でもないんですね、外国人のいることが。

だけど今学校の現場では、普通の大学の教育学部を出て、教員の免許を取って、そうするとそこに問題児がいたり、あるいは初めて見る外国人のお子様がいらしたりして、いきなり難しい授業を持たなくちゃいけないということになって、非常に苦労するということ

がありますので、実は国際化の問題は先生の問題でもあるんですね。子供だけの問題でなくて、先生の問題でもある。

しかし同時に、こういう外国籍でありながら日本語を勉強し、日本語のカリキュラムに従ったものをきっちりマスターした上で、難しい大学の入試に受かって、そして同じ苦労をする後輩に対して助けようというそういう青年もいるわけですね。

私はもっとこれは加速させるべきだというふうに強く思っておりまして、何しろ、特にブラジルには日本人が 1908 年に渡って以来、一番たくさんの日系人がいるところです。お子様たちが生まれましたので、120～130 万人の日系人がいるんじゃないでしょうか。世界で一番多いです、アメリカよりも多いですよ。どこよりも多いということで親日的なわけですね。そうしたところを大事にできるという条件がこの西部にあるわけですね。

この磐田でそういう外国籍の中学生を支援する事業を始められていたと。それは何年ぐらい前になりますかね。６，７年前ですか。ですからそのころに始められたというのは偉いと思います。

一体的に外国人と一緒にやると。そして子供にとって親御さんがどういう事情であろうと、ちゃんとしっかりと教育を受けて立派な大人になっていくというふうに送り出すのは我々の仕事ですから、それを制度的にも支援していくことが大事でしょう。

相撲でもそうでしょう。日本語をしゃべり、横綱としての風格を学ぶようにし、そして堂々と胸を張って伝統の国技を担っていると。それがモンゴルの人であれ、あるいはエジプト人であれ、もうすばらしいことで、これこそまさに日本の和の精神だというふうに思うぐらいなんですよ。だから偏狭な排外心的なものは、もう吹っ飛ばさないといけないと。

そういうものの先頭にいろいろと障壁があるかもしれないけれども、発言者５君は、あなたのやっていることはすばらしいことで、「あのお兄ちゃんのようになりたい」という背中を見られても堂々と見せられるような、そういう生き方をしてくださるように心からお願いをしたいというふうに思います。

それから、発言者６さんのこの訪問看護というものの重要性は、改めて知りましたと同時に、言われてみれば当然のことであると同時に、訪問看護師の資格を持っている方が県下で 10 名をちょっと超える程度だというのは、ちょっとショッキングな数字です。在宅医療の重要性は言われて久しいんですけれども、これをどう実現するかということで、これは看護師も不足していますし、実はお医者様も不足しています。

すなわち言われたことは全部そのとおりなので、これが重要だと。ではどのようにして

その数を増やし、そしてステーションの機能を、所長さんがいらっしゃるそういうステーションの組織を充実させていくかということですね。これは充実させていく方法をとると、差し当たっては、今５人以下だとできにくいということですけれども、どれぐらいいらっしゃるとそれができるのか。しかしまた看護師も今不足しております。実はお医者様も不足しています。

そのお医者様も、病院に行くとそれぞれ皆専門家が違いますので、私どもは言ってみれば家庭医のようなものですね。差し当たって発言者６さんのような方に相談すれば、自分が手に負えない場合にはきちっとしたところに紹介してくださる、同じようにお医者様も何でも一応その方にお聞きすればできるというそれを実はつくろうと思っているんですよ。そういう科目のことを社会健康医学と言うそうです。

これは 21 世紀になってからその重要性が、余りにも医学が専門化してきたがために、全体のことを見ることができる人が少なくなってきたと。そして予防医学というのも重要になってきたし、病気になる前にぱっと言ってくれる人がいるとありがたいということで、それを京都大学が社会健康医学というそういう科目として大学院のレベルで設定したんですね。

私はこれを取り入れようとしておりまして、この社会健康医学、そこにこういう看護をする方と、それからまたお医者様になられる方と、それぞれの御希望に従って、そういう人を訓練していくと。そしてそれを増やしていく。これは一朝一夕には残念ながらできません。

御家族のことと御本人のことがわかっていると。御本人の病気についてわかることは専門家ならできますけれども、御家族の中でその方がどういう位置にいらして、したがってその家庭のことがわかっていて、そしてその方の相談に気楽に乗れるという看護師さんと、それからお医者様です。

そうしますと、病気になる前に、あるいは家庭的にどういう遺伝を持っていらっしゃるかということもわかっておりますと、病気になる前にいろいろな措置ができるということもございまして、これからの医療というのは、さっきは未病、病気と元気の間のいまだ病気にならずという未病という言葉を使って、私どもはこれを社会健康医学ということで、健康寿命を延ばすということと絡めて、健康寿命は日本一ですから、それを延ばすということと絡めて組織化していくと。以上であります。

【発言者６】

今現在、地域包括ケアシステムという言葉がいろんなところに舞い上がって、いろんな会議があったりとか、いろんなところでいろんな発言があるんですが、いまいち自分のものとして、自分のまちの問題としてとらえてないような気がするんですが、磐田市でもとても熱心に取り組みはしています。市民の方でも医療に関わり方、それから自分の最後の締めくくり方を考えようという市民団体もできたりとか活発になっておりますが、どうも何となく迷い迷い進んでいるような状況であります。

県の方としましては、各地域温度差があると思いますが、どこかのモデルの市があったりとか、このような取り組みをしていてとてもいいよという評判だとか、そういうあたり、もし知事の耳に入っているようでしたらお聞きしたいなと思いました。

【川勝知事】

少し東の方に行った掛川に「希望の丘」というのがこのほどオープンしたのは御存じですか。そこは特養も入っておりますし、保育園もあるし、病院もありますし、それから障害を持ったお子様たちを預かる学校もあります。全部が１つになっているんですね。

ですから高齢になって、そして何が楽しいかというと、だんだん要らぬ邪心だとか、欲心などというものが浄化されていって、子供のときのような、本当に素直な気持ちをみんな持っているわけですけれども、そうしたものがとても重要です。それが目の前に子供たちがいると、お年寄りによっては全く見飽きないわけですね。外国などでもよく公園に行かれると、老人がじっとお座りになっていると。その前で子供たちが自分の孫じゃないんですけれども、遊んでいると。それを見ているだけで心が和むと。それを医療に生かしたらどうなるかということで、「希望の丘」ができたんじゃないかというふうに思っているんですね。これは今新しい地域の包括的なケアの一例ではないかというふうに思います。

【発言者２】

今世間でも話題になっているＴＰＰの問題ですけれども、ＴＰＰはいいという意見とよくない意見がありまして、価格が上がったらだめだという意見がほとんど聞こえてくるんですけれども、知事の考えをお願いします。

【川勝知事】

農産物というのは、皆さん安いから買いますか。値段は必ず見ます。しかし、どこの産なのか、あるいはそれが傷んでないか、賞味期限が切れてないか等々必ず御覧になるでしょう。これは広い意味で品質というふうに言うことができると思います。ですから価格と品質と同じくらいに重要ではないかというふうに思います。

安い、しかしどんな肥料を使っているかわからない。ひょっとすると人間にとって害悪のようなものが入っているかもしれないというようなそういう事件もございました。そうなりますと、安いからいいというふうになると、後で病気にかかって高くつくということになります。

私は静岡県の農業というのは、農芸品であると。つまり、それは品質が高い、ブランド力を持っている。

我々は 339 もの農芸品を持っております。品質で勝負をするという時代が来ているということだと思います。ですから、私は静岡県の農業は品質で勝負できると。一番最初に農業を調べたときに思いました。それはもうお茶に典型的です。

例えば緑茶といって最高級のものを我々がもらって中国に持っていくと、中国における最高のお茶をつくるところが、実は我々と三十数年間友好関係にある浙江省じゃありませんか。浙江省の都は杭州というふうに言います。杭州は中国では茶の都、「茶都」というふうに言われております。そこは龍井（ロンジン）茶という清の時代の乾隆帝がお植えになられたくらい有名なお茶もあるくらいで、そこのお茶を我々がいただきますね。同じグリーンティです。だけど最高級のお茶をもらっても、余り飲まないんですね。我々の静岡の最高級のお茶を持っていっても、向こうも飲まないじゃないですか。飲み方も違うし。

ですからグリーンティと言っても、私はそれでどうしようかと。一緒に勝負をしようと。つまりグリーンティ同士で争うんじゃなくて、一緒に組んでお客様に、例えばアメリカに持っていって、茶の都としてユネスコに認定していただいて、日本と中国、持っていくと龍井茶と静岡茶と持っていけば、味も違うし、飲み方も違います。そうすると選ぶのは向こう側だと。

ですからネギだ、あるいは芋だ、あるいは小麦だといっているけど、実際小麦でもパン用の小麦と、それからケーキ用の小麦と、うどん用の小麦と全然違うでしょう。ですから実はそれぞれ極めて重要な品質というのがありまして、我々はそれを勉強するために農芸品というふうにして、その品質で勝負する。

だからＴＰＰは交渉をしなくちゃいけないという、交渉に入るか入らないか。入らないと言う人がたくさんいらっしゃいました。私は入って、自分のことを国益をしっかり知った方がいいと。

その土地のものは土地で消費するのが、しかも季節のときに消費するのが一番よくて、それでも欲しいなら食べにいらっしゃいということもできます。

そして、さらに余っているもので海外で勝負したいということであれば、粉末茶においては海外で勝負すると。煎茶においてはこちらで日本の和食と一緒に飲まれるとおいしいですよということで、まず食事については、自分たちの大地の産んだものを自分たちがいただくというそういう文化をつくり上げるということが一番大事で、そして私はＴＰＰに関しましては、価格のことしか言ってないけど、実際はもう一つ大事な品質というのがあって、品質ではどこにも負けないという自信があります。ですから全然ＴＰＰを怖がってないですよ。

1994 年でしたか、米の作況指数が 75，6%になりました。お米が足りなくなったので、当時の首相がお米を入れることにしたんですよ。そのときに大反対が起こりましたけれども、背に腹はかえられないということで、クオーター制というので量で入れることにしたんです。

ところが、私そのとき大学の教員をしておったわけです。当時、４万人の飢えたる青年がいるわけですよ。４万人ですよ。その連中は、周りにある食堂に行って、大きなどんぶり飯と辛いおかずで腹を膨らますんですね。

ところが飯がまずくなった、外米が入ったので。学生が行かなくなったんですよ。それで今度政府はブレンドにしてよろしいと、日本米と混ぜて。そしたらそれもまずいということで、味覚というのがある種のものをこれは違うということで受け付けないんですね、ご飯のようなものは。

ですから、これは関税ではなくて非関税、関税でならない障壁、文化的障壁で、実は向こうの米は売れなくなって、古米、古米、古米になっていった。毎年クオーターで一定量入れなくちゃいけないから、その古古米があるとき事件を起こしました、傷米ということで、それを売ったわけですね。そしてそれが結果的に犯罪になったということがありました。

ですから、人は自分が生きるために物を食べるのであって、そのときに色も見る、匂いも見る、それからそれがどういうものであるかということを直感的に見ながら、ましてやお母さんは自分の小さな子供たちにおかしなものは食べさせないですよ。一番確信が持てるのは何かというと、自分たちでつくったものです。だから、外国のものを排外するという必要はありませんけれども、選ぶことができるのは自分たちですから、我々のところは春夏秋冬いつでも食べるものがあるというそういう特異な県の長所を生かすことができると、こういう地域だということで、それが僕の意見です。

【発言者３】

私子供の支援もしていますが、ママの力とか、女性の力って潜在的にいろいろあると思って、そういった支援もしているんですね。

例えば私ママになって保育士になったんですけれども、周りの方で保育士の免許はあっても、仕事についてないという方とか、また子育てでこういうキャリアがあったけど、今ちょっと仕事をやめてますとか、そういう方のために就労支援じゃないんですけども、ママのための就活活動みたいな活動もしています。

その中で４年間のうちに４人の方を、就職のあっせんというか、させていただきました。政府とかも女性の力はすごいとか言うけれども、なかなかそれを発掘したりとか、そういう場が少ないかなというのを私は感じていて、私の周りのすばらしい人材とかいらっしゃるので、それこそコーディネーターみたいにして、こういう方がいらっしゃるんだけどどうでしょうかということを紹介したりしているんですけれども、何かそういった女性のための県の方で何か活動というか、そういう場があればいいなというのは常々思っています。

【川勝知事】

ママさんたちが、あるいはかつてバリバリやっていた方が、お子様の子育てが一段落したので仕事に戻りたいと。元の職場はちょっと戻りにくいのでとか、あるいは新しい職場で、新しい職場とはいえ、自分の家庭のことがあるので、一定時間しか外に出られないとか、いろんな御事情があるので、これに応じた形での支援をしていくというのが、これからの女性の働きやすいワーク・アンド・ライフ・バランスと言われているもののやり方ではないか。

だから、働くというのは午前９時から午後５時ということではないと。例えばホテルがこれから重要になってくると思いますけれども、ホテルのベッドメイキングというのは、チェックインが午後２時か３時ですよね。そのときまでにホテルのベッドを整えなくちゃいけない、寝床を整えなくちゃいけない。そういう職種というのはあるわけですね。ですから職種によってパートで、仮に資格を持ってなくてもできるということがあると思います。

ただ私は保育士が足りないんですね、介護、看護、この方たちも足りません。それは特に介護の場合に、力仕事とか、あるいは給金が十分でないというような理由もあるみたいで、これは上げないといけないということで、今キャリアパスというのを確実に、給金が年齢に応じて上がっていくという、コーディネーターからプロデューサーになっていくと

いう、そういうものも導入しているんですよ。

そしてまた大体 28～９歳でやめていく人が多いので、その人たちを介護のナビゲーターに県で数十名認定いたしまして、誇りを持っていただこうというふうなこともやっているんですが、一番大きいのは、やはり女性の方々がその能力を発揮しつつ、かつ、お子様を御主人と一緒に育てられるということで、ですから私お子様を職場でおんぶして働いていてもいいというふうにしたらどうですか。

八百屋さんだとか、あるいは商店街などというのは、御主人と御婦人が一緒に商店をあずかっていて、そこに子供がいれば、買い物客が来たときに、「ああ、太郎ちゃん大きくなったのね」とか、「よく大きな声で泣いて元気な子ね」とか、やっていたじゃないですか、つい最近まで。それがもう皆サラリーマン社会になって、家に子供を置いて、そして自分は出ていかなくちゃいけないというふうになっているというので、実はこういう通念というのは、そういうものだと思っているだけだけど、違うと思います。子供が泣くのは当たり前ですよ。

ですから、知事室に子供を連れていらっしゃいと。そうするとやかましいと、やかましいのは当たり前だと。みんなであやせばいいと。それは職場結婚が多いんですよ。それで女性だけが有給休暇を取るということになっているので、何とか初めから、最初の１年間ぐらいは別にしても、お子様を 6,000 人の職員と一緒に育てると。皆大人ですから。

しかも最近は女子職員の方が多くなってきているんですよ。4、5 割が女子職員です。子供預かり所をつくりたいということで、県の中に５年間かけてつくる。５年目にようやくつくることができました。

そうしたところに自分のお子さんを連れてくるし、お父さんも、それからその部署の人もみんなでお子様をあやしに行きましょうということで、ともかくお子様が働いている場から遠ざかったのは近々昭和になってからです。それ以前は常にお父さん、お母さんの、例えば野良仕事だとか、あるいはお店でその背中を見ながら、また子供の顔を見ながら親は仕事をしていたはずですよ。ですから、そういう社会をもう一度つくることができないかというふうに思うんですね。

子供は家に置いておくものだと、保育園に必ず預けるものだと、それもいいですよ。だけど、そういうものだという、そしてもう待機児童をゼロにする、確かにそのとおりですけれども、だれがだれを待っているんでしょうか、待機しているのでしょうか。本当に待っているのは子供がお母さん、お父さんが迎えに来てくれるのを待っているわけでしょう。

だから空くのを待っているお父さん、お母さんじゃなくて、ずっと待機させられているのは子供それ自体です。

だから子供が常にいることにすれば待機する必要はありませんので、ですから子供を親が仕事をしながら育てるのは当たり前です。その間はちょっとむずかったりしたときには、それなりの場所でちゃんと子供をあやす。静かに寝ているかどうかというのをみんなで見たりするというふうな、そういう文化がもう一度できていいんじゃないかと。私は実は県庁で目指しているのはそれです。みんなで育てると。

【傍聴者１】

こんにちは。私もブラジル人で、今年大学を卒業して、磐田の会社で働かせていただいているんですけれども、きょうは発言者５さんのお話を聞いて、やはり自分も大学時代に熱心な先生がいらして、私も何回か自分の話をしたり、そういう外国人を励ます活動をしてきました。今は職場で新しいことを覚えることに追われていますが、改めて自分の置かれた立場を生かして、地域のために何かをしていきたいなと思って、とてもうれしい気持ちです。知事のそういう支援をしてくださる姿を見れて、とてもよかったです。ありがとうございました。

【川勝知事】

実はですね、留学生の方のために一番困るのはアパートだとか宿舎ですね。お金のある会社だとかが、留学生会館というのをおつくりになったりします。私はこれに反対です。

なぜかというと、留学してくる方は日本を知りたいと言って来ているんですよ。そうすると留学生会館は留学生だけを隔離することになるので、ですから留学生は決して安いから、あるいは一応住むところがあるからということではありがたいけれども、本当の親切ではないと思うんですね。

青年たちがなるべく一緒に生活ができるような、そういうところを場所として提供することがいいということなんですね。留学生が留学生だけでというのはやっぱりよくないんですよ。多文化共生というのはそういうことです。

そして一番いいのはホームステイをさせてあげるということですね。長い期間でなくてもいいんですけれども、初めてホームステイをして、もうお父さん、お母さんと言える人ができたと。初めて畳に座って座布団、それからお茶碗とお箸で皆さんと一緒に味噌汁をいただいたというのを一生忘れないんですね。

ですから文化の一番基礎は生活文化だと思います。これは衣食住ですので、そうしたも

のを一緒に経験するように、そういう環境をつくって差し上げると、あっという間にその方は自国の文化の大使であると同時に、日本のこともよくわかって、その両方をつなぐ草の根の大使になっていくんですね。留学生を大事にするということは、実は日本人を大事にするということにも、日本語を大事にするということにも通じる。何も国際化は英語をしゃべるということじゃないんですよ。

本当の国際化は日本の立場から言えば、お相撲さんがそうであり、ラクビーがそうであるように、日本語が国際化すると、それは日本語は日本文化の一番の基礎だからです。目に見えない方における文化は言語ですから、それが日本の文化の基礎になります。しかしその基礎は生活文化で衣食住だということですね。これを共有するのが望ましいと。どこかで念頭に置いていただければと存じます。